

ぬ 野〔名〕の〔野〕に同じ。「古語」萬葉春のぬに鳴くや鶯なつけむとわが家(こ)の園に梅が花咲く「同妻(こ)もあらば取りてたげましきみの山野(こ)の上(こ)のうはぎ過ぎにけらずや」「玉也、此云努力」

ぬ 沼〔名〕に〔瓊〕に同じ。「古語」お「瓊、沼」

ぬ 田〔名〕

ぬ 奴〔名〕「地」ぬのくに(奴國)を見よ。

ぬ 寝・寐〔動下二目〕臥して眠る。いぬ。なる(寝る)(参照。「古語」萬葉ながらふるつま吹く風の寒き夜にわがせの君はひとりかぬらむ」甚な大殿(は)こもりおはしましそとて、ぬべきものにも思したらぬを」

ぬ 寝(×)るが中(×)なる夢【句】次條に同じ。正統臥寐るが中なる夢の世、今に始めぬ智とは知りながら」

ぬ 寝(×)るが中(×)の夢【句】『古今和歌集なる壬生忠岑の歌に「ぬるがうちに見るをつのみやは夢といはんはかなき世をもうつとは見す」とあり 即ちこの世のはかなく變りやすきを、夢に譬ふることあると、區別していふ語」夜の夢。兼生「あはれるなる世の中は、ぬるが中の夢に劣らぬさまり」

ぬ 寝(×)る魂(×)【句】ゆめ(夢)の異稱。相模集「ぬるたまの中にあはせしよき事ゆめゆめ神よちがへざらん」

ぬ 寝(×)る魂(×)の夢【句】前條に同じ。夫本ぬる玉の夢は現(ま)にまさりけりこの世にさむる枕變らて」

ぬ 寝(×)る夜落ちず【句】一夜もたゆまず。一夜も餘さず。毎夜にてあり。「古語」萬葉山ごしの風をとききみぬる夜落ちず起るな妹をかけたけしぬびつ」

ぬ 寝ても、起きてても【句】次條に同じ。根田志具佐「寝ても起きてても、若衆の噂」

ぬ 寝ても、覺めてても【句】おきふしに(起臥)に同じ。古今「わりなくもねてもさめても戀しき心をいづちやらば定(さだ)まれん」後疊「宿みればねてもさめても戀れん」

しくて夢現ともわかれざりけり。照式夕寝よてふ鐘（句）次條に同じ。照式夕つつのなどてまだきに入りぬらん寝よてふ鐘の音もせなくに寝よとの鐘（句）夜深くなりて鳴る鐘を、起きぬる人に、寝ねよと告ぐるものの如く思ひなしていふ語。萬葉みな人を宿（き）よとの鐘は打つなれど君をし思へばいねがてぬかも」

ぬ【助動】輕き過去の意。「な」に「ぬ」ぬる」「ぬれ」「ぬ」と活き、つと同意なれど、多くは自動詞に添ふ。ぬ参照。

ぬす（希Noms）【名】「哲」希臘のアナクサゴラス（Anaxagoras）の世界を、秩序あり、目的あるものとし、その目的に到達するための運動の原因を、微細にして動きやすく、自ら動きて、他を動かす物質に在りてと見、その名稱として採用せる語。プラトン（Platon）これを非物質的に純化して、その至高のイデア（Idea）なる善と美とのイデアの名稱として用ひ、アリストテレス（Aristoteles）も、非物質的目的論的宇宙至高原理とし、新プラトン派に於てはこれを絶対より流出する第一階段のものとしり。【精神の實體又は至高の精神能力。

ぬろほ（ヒギ）ヌウボオ式（佛Nonveau）

【名】『あるぬろほを見よ』圖案の方式の一。同じ太さを有する輪廓にて限取りたるもの。簡朴溫靜の感を與へざるに非ざれども、變化乏しく、單調にして、情味の缺けたる缺點を有す。【規模大に、素朴にして、趣あるやうなれども、變化乏しく嫌ある物又は行動の譬。

ぬえ鵲鵲【名】『鵲の字は、もと雉に似たる一種の鳥の名なるを、夜出でて鳴く鳥の義に取りなして、この語に充用し來れるなり』【動】ぬえぬえ（虎鵲）に同じ。記「青山にぬえは鳴き」十通「高倉院の御時、御殿の上に鵲の鳴きけるを」太平記「近衛院の御在位の時、鵲といふ鳥の、雲中に翔りて鳴きしをば、源三位賴政卿勳勳を蒙りて、射落したりし例あれば」【前項の引例の如く、十訓抄と太平記とに見

えたる源三位親政の事蹟を誤り傳へたるものに『源賴政が、近衛天皇の御代に、禁中にて射獵りたる由、平家物語及び源平盛衰記に記せる怪獸。鳴く聲、鶯に似、頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎に似たりきといふ。さるとらへび。』諸曲の一。

近衛天皇の仁平三年、内裏にて、源賴政に射られし鶯の幽鑑現れて、僧の巾を受くる事を作れるもの。四首尾調はず、統一なき事物の譬。前後不揃。ぬえしき(鶯式)参照。

ぬえくさ 萎草〔名〕なえなえとしたる草。しをれたる草。〔古語〕

ぬえくさの 萎草の「枕」ぬえ草の如くかよわき女といふ意より、め(女)にかけていふ。記「八千矛」の神の命。ぬえぐさの妻(に)しあればわが心うらすの鳥ぞ」に同じ。

ぬえこどり 鶯子鳥〔名〕「動」ぬえ(鶯)に「えこどり」鶯子鳥「枕」鶯子鳥は鳴く聲の悲しく恨めしげなるより、忍音に思ひ歎く意なるうらなげ(心歎)及びのぞぶ(喉呼ぶ)にかけていふ。ぬえざりの鶯鳥の(参照。萬葉むらぎも心を痛みぬえこどりうらなげ居れば)同(飯)炊くことも忘れぬえこどりのどよぶを。に同じ。

ぬえしき 鶯式・鶯式〔名〕首尾調はず、統一なき狀態。「動」次條に同じ。

ぬえじない 鶯じない・鶯じない〔名〕ぬえこどり 鶯鳥・鶯鳥〔名〕「動」ぬえ(鶯)に「じない」同(じ)に同じ。徒然、ぬえ鳥の鳴く時、招魂の法を行ふ。

ぬえざりの 鶯鳥の・鶯鳥の「枕」鶯鳥鳴くは、鳴く聲の悲しく恨めしげなるより、うらなげ(心歎)にかけていふ。ぬえこどり(鶯子鳥)参照。萬葉「ぬえ鳥のうらなげしつ下戀」に思ひうらぶれ。鶯鳥の鳴くを、妻を戀ひて鳴くものと思ひなして、かたこひ(片戀)にかけていふ。萬葉ぬえ鳥の片戀づま朝鳥の通はす君が」ぬえよす 萎臥す・偃す「動四自」横たはるり臥す。のえふ。〔古語〕

ぬか 窟、〔名〕ひたひ(頰)に同じ。〔古語〕

ぬか

ぬかづくこと。叩頭。拜禮。昔隨て居てうち行ひ、曉のぬかなど、いみじうあはれなり」

ぬかの聲「句」ぬかづく時の聲。「古語」散本はじめなき罪のつもり、悲しさをぬかの聲でなき立つたりの

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかに釘を打つ「句」手こたへ無く、利目(ま)の無き聲。豆腐に釘(ま)を打つ。暖簾(の)に腕押(ま)で。沼に杭(ま)を打つ。「古語」俗間男作世の員明「ぬかに釘打つ私(ま)が意見、どうて思ひはさんすま(ま)」

ぬかに釘を刺す「句」前條に同じ。「古語」ぬかの中にも紛米(ま)「句」價值なき物の中にも、少しは取柄(ま)ある聲。

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかえ

ぬかえ「名」(植)しそ紫蘇に同じ。「古語」和名葉細而香、其實黑者曰蘇、乃良衣。一云、奴加江」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬか「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかし「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかだ「名」ぬかづく(額突く)に同じ。昔僧都の君のぬかをさへ突きて取りたまひてき」

ぬかみそ

ぬかりあり

ぬきあし

をゑのわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしざ こけくきか おえういあ

ぬきえり

ぬきえり 拔襟【名】前條に同じ。
ぬきがき 拔書【名】他書より、必要の部
分を抜き取りて、書くこと、又その書き取
りたるもの。ぬきはぬきうつし。抄書。
鈔録。摘録。拔萃。

ぬきかく 脱掛く脱懸く【動下二他】
脱きて、物に掛く。古今「主知らぬ香こそ
句へれ秋の野に誰」が脱ぎかけし藤袴
ぞも。肩脱【名】を脱ぎかけし掛。源氏
「皆人の脱ぎかけたる物の色色なども」
ぬきかけ 脱掛脱懸【名】肩脱【名】を
脱ぎかけたること。一代男「また脇あけの
女、……ゆたかに脱懸して、肌帷子【名】
の紋所に」一代女「著物【名】三つが過ぎた
と、肌著は残して、脱掛して」

ぬきかきす 拔翳す【動四他】刀を抜き
て、頭上に振りかざす。「真額【名】に抜き
かざす」兼記「互に打物抜きかざし、朝
日にかがやく剣の稲妻」

ぬきかすむ 拔掠【動下二他】抜き取
り、掠め取る。掠抄掠、ヌキカスム
ぬきかたな 抜刀【名】刀を抜くこと、又
抜きたる刀。抜刀【名】。名筆「吃字」將監
殿「やおはする、光信殿と呼ばはり、呼ばは
り、抜刀、簀戸押開き、ずと入る」

ぬきがは 貫河【名】催馬樂【名】の律の曲
の一。

ぬきかふ 拔替ふ【動下二他】物を抜き
取りたるあとに、他の物を挿し入る。平治
「泉水とて、同じ程なる太刀ありけるを抜
き替へて進」らする」

ぬきかふ 脱替ふ【動下二他】きかふ 著替
ふに同じ。後襲「思ひきや君が衣を脱ぎ
かへて濃き紫の色を著んとは」

ぬきかぶり 縷車【名】いさるま(縷車)に
同じ。「古語」和名「縷車」著絲於第二也。
沼岐加不利」

ぬきかへ 脱替小袖【名】脱ぎ替
ふるために、豫め幾枚も造りおく小袖。五
人女帯はしやらほだけそをのまに、あ
またの脱替小袖積み重ねたる物陰に、う
つつなき空軒【名】、心にくし」

ぬきから 緯柄【名】「布」は緯柄を見

ぬききり

ぬききり 拔伐【名】「農」かんばつ間伐
に同じ。

ぬききり 抽櫛【名】さしき(抽櫛)に同
じかるべしといふ。東鑑「授刀并抽櫛等
於嬰兒」

ぬきくつろぐ 拔寛ぐ【動下二他】抜き
かけてゆるめておく。狂言「おき」この太刀
を、鉦元【名】抜きくつろげ」

ぬきこじ 抜巾子【名】巾子と襷とを取
放して造りたる冠、昔、元服の時に用ひた
り。はなちこじ。

ぬきさき 貫前神社【名】上野
國北甘樂【名】郡一宮【名】町に鎮座せる
國幣神社。祭神は經津主【名】神。白鳳七
年の創祀に係るといふ。

ぬきさき 拔差【名】抜き取ること、
差し込むこと。日除くこと、加ふるこ
と。取捨。増減。日移し變ふこ
と。やりくこと。處置。新永代「拔差
のならぬ手形」世間「手代氣」手前に、拔差
のならぬ脇差の鑑【名】が詰り切りて」

ぬきさめ 拔鯨【名】鯨皮の一種。若風俗
「拔鯨の大腸差」

ぬきさや 貫鞘拔鞘【名】馬具の一。多
くは虎豹などの毛皮にて造り、力革【名】の
鍔具【名】を被ふもの。包む。

ぬきし 拔師【名】すり(摘撲)に同じ。老
人「無馬」盗人の、刀斧【名】小刀などを抜き
取ることをしてたり。この故に、盗人を抜
師と云ひし。今のすりと云ふが如し」

ぬきしな 拔品【名】ぬきに(抜荷)に同じ。
ぬきしな 拔狀擢狀【名】早飛脚の行
きよ、特に至急を要する書狀を抜き取り、
別に急飛脚を仕立てて、夜も休まず送
り届くるもの。

ぬきしる 緯白【名】練貫【名】の一種。經
緯は紫、緯は白にて織りて、筋な
きもの。やなぎいろ。

ぬきす 貫簀【名】丸く削りたる竹を編
みて造りたる簀。盥などの上におきて、
手を洗ふ時、水の散らぬやうにせしもの。
伊勢女の手洗ふ處に、ぬき簀を打ちやり

ぬきす

ぬきす 脱掛【動下二他】ぬきす(脱
掛)を見よ。

ぬきす 抜拾つ拔棄つ【動下二他】抜
き取りて捨つ。若風俗「肥前の忠吉【名】二
尺三寸、同作一尺八寸の差添小刀抜き捨
て、目釘をあらため」

ぬきす 脱捨つ脱棄つ【動下二他】脱
ぎて、そのままにしおく。

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきす 脱捨脱棄【名】脱ぎ捨つこと
と、又、脱ぎ捨ててある物。若風俗「脱捨の
小袖を疊め」

ぬきだし

ぬきだし 載せて、のひらにて押へ
ながら、金串を抜くに用ふ
る臺。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

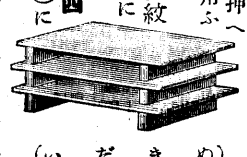
ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。

ぬきだす 抜出す【動四
他】ぬきだす抜出すに
同じ。



ぬきてわた 抜出綿〔名〕ぬきわた(拔綿)に同じ。小町舞降る雪や雲の衣の抜出綿

ぬきどほし 貫通〔名〕帆の一部。

ぬきどほす 貫通〔動四他〕つらぬきて通す。つきとほす。

ぬきどむ 貫止む〔名〕〔動下二他〕玉などを緒に貫きて、つづり連ぬ。後、ぬき止むる秋しなれば白露の千草における玉もかひなし。

ぬきどり 拔取〔名〕ぬきとること。

ぬきどて 拔出〔名〕ぬきとること。

ぬきどてり かんてい 拔取鑑定〔名〕多くの中より抜き取りたる一部に就きて鑑定し、その他は類推すること。

ぬきどてり 拔取る〔動四他〕引き抜きて取る。多くの中より、或部分を擇び取る。抜き取る。

ぬきどてり かいをく 貫名海屋〔名〕〔人〕書家兼書家。名は苞、字は子善、又、君茂。通稱は泰太郎。別號に海客、菴翁等あり。阿波國の人。儒を以て、京都に居り、書は錢穀の風を喜び、又、南畫の山水を善くす。文久三年歿す。年八十六。

ぬきどてり 拔荷〔名〕多くの商品の中より、ひそかに抜き取り盗みて賣りこかす物。ぬきじな。

ぬきどてり 拔糊〔名〕無地に染めたる物に、種種の模様を、拔染(ぼくせん)にして現すに用ふる糊。

ぬきどてり 拔放す〔名〕〔動四他〕刀などを勢よく抜く。ぬきはなつ。〔じ〕。

ぬきどてり 拔放つ〔動四他〕前條に同じ。

ぬきどてり 拔歩〔名〕検地の時、一枚の田畠の中に大石などの在る場合に、その部分を本歩(ほんぽ)の内より除きて測れる面積。

ぬきどてり 拔穂〔名〕〔動四他〕稲の穂を抜き取る。こと、又その穂。太平記「神泉苑の北に齋廳所を作つて、舊主、一日、拔穂を御覽せらる。」ぬきがき。抄録。摘要。

ぬきどてり 拔穂の式〔名〕登極令第十條に定むる所に依りて、大嘗祭の齋田の稲實成熟の期に、勅使を遣し齋田に就きて稲の穂を抜き取る儀式。

ぬきどてり 拔穂の使〔名〕大嘗祭の時、拔穂田の稲穂を抜き取るために派遣せられし使。修紀(きし)「主基(すし)の兩國に、二人づつ遣されたり。太平記、國郡を卜定して、拔穂の使を、丹波國(たには)へ下さる。」

ぬきどてり 拔穂使〔名〕前條に同じ。

ぬきどてり 拔穂田〔名〕大嘗祭の神饌の料とすべき稲の穂を抜き取る田。齋田。

ぬきどてり 拔本〔名〕淨瑠璃の丸本の中より、文句の一部を抜き出せるもの。ハ笑ハ拔本では無(な)え、丸本だといふに、ぬきまわつて、抜儲く〔動下二他〕刀を抜きて待受く。ひきまわつて(引儲く)参照。盛衰野忠度は、赤木の管(くだ)に銀の筒金(はし)を巻きたる刀を抜き儲けて。

ぬきどてり 拔身〔名〕鞘より抜き放したる刀又は槍。しらは。白刃(はくじん)。陰莖を刀の刃に當てていふ。男子の、裸體にて、褲を締めぬこと。〔俚語〕

ぬきどてり 拔身の盃〔名〕盃のかはりに、拔身を相手の面前に差出すこと。心中(しんちゅう)思ひがけなし拔身の盃、死装束(しそうぶく)に吃驚(きつこう)して。

ぬきどてり 貫亂る〔動四他〕貫きたる緒を抜き取りて、珠玉などを散亂せしむ。伊勢(いせ)ぬき亂る人こそあるらし白玉の間(なまきり)なくも散るか袖のせばきに。

ぬきどてり 揃んづ〔動下二他〕ぬきいづ(抜出づ)の音便。

ぬきどてり 揃んづ〔動下二他〕前條の語の轉義。えりぬく。選抜す。拔擢す。

ぬきどてり あみ 抜目編〔名〕編物を編み終へたる時、最後の糸を、編棒にて、目をつくぐらせた上、引抜きて結ぶこと。ひきぬき。

ぬきどてり 貫入〔名〕貫入(くわんにゅう)の略。じゆず(數珠)の異稱。七職人(しちしやくにん)の獨寝(ひとりね)の身をも放たてぬきれこそわが手枕(てまくら)のふしとなりけれ。

ぬきどてり 拔綿〔名〕古著・古蒲團(こぼん)などを解きて抜き取りたる綿。ぬきてわたぬき。

ぬきどてり ぬきをさ 緯箴(きせん)〔名〕機(はた)の横糸を通すに用ふるをさ。

ぬきどてり ぬき温〔名〕人を罵りていふ語。ぬけさく。まぬけ。ぬく太郎。重頼(しげたか)子やいやい、餘程(よほど)にあがけよ。其處(そこ)なぬくめ。

ぬきどてり 抜く〔動四他〕打込まれ、插まり、まさり、生えなどしてある物を引き取る。引き出す。〔抽く〕刀を抜く。齒を抜く。〔草を抜く〕瓶詰(びんけつ)の酒を飲むために、その栓を抜き取る。目(め)を選び出して用ふ。必要な部分又は人物などを取出す。抄出す。拔擢す。〔抽く〕四除く。はぶく。へらす。手間(てま)を抜く。汚點(おとし)を抜く。〔先に進みたる者を追ひかけて、却て先立つ。追ひぬく。追ひこす。あざむく。瞞(ま)す。狂言(きやうげん)末廣(すえひろ)がり。買物(かひもの)に抜かれて。ぬきし(抜師)参照。攻め落す。城を抜く。〔つらぬく。つきぬく。とほす。貫く。じぬく。貫貫(くわんくわん)参照。其橋はおのが枝枝(えだえだ)なれども玉にぬく時同(ときどう)じに緒(いと)にぬく。果(は)す。遂(つい)ぐ。〔他の動詞の下に添へて用ふ。浮世風流(うきふうりゅう)困らせぬいたはな。八笑(はっしやう)人(ひと)己(おのれ)あ、もう貫められぬいたせ。〔商〕取引所の仲買人などが、店員をして、出来相場を、得意先に通知せしむ。〔取引所の語〕。赤子(せきし)坐り又は臥したるままにて、小便す。〔俚語〕。尿液(うりえき)を洩して、情慾(じやうよく)を満足す。〔俚語〕。抜け、鞘持(さやもち)つ。句(く)加勢(かせい)す。助力す。

ぬきどてり 抜く〔動下二他〕挿まり、まさりなどしてある物、搖ぎて放れ出づ。組を離る。〔他〕よりすげれ出づ。ひいづ。ぬけいづ。〔抽く〕源氏(げんじ)つかさ位高(き)くのぼり、世にぬけぬる人。〔除かれて、無くなる。消え失す。汚點(おとし)を抜く。四漏(しりゅう)る。落つ。脱落す。抜けたる文字。脱出す。平治(へいじ)愛(あい)に在りては悪しかりなんと、足に任せて抜けたまふ。和合(わが)私の方(かた)の喧嘩(けんか)と寸分(すんぶん)相違(さかた)の無い話(はなし)ゆゑ、どうあつても、おかかひ合は抜けませんとおぬいぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬきどてり ぬきぬく(言抜く)の略。柳井(やなぎい)川(がは)どめとお

ぬけじ 抜字「名」書き落したる文字。
脱字(ツ)落字。

ぬけじゅう 拔衆「名」衆に抜けて出てあること、又その人。拔群。好色狂者萬屋の何がし、娘を捨ていへる、たぐひなきぬけしゅう、今の世の美人」。

ぬけそ「名」見附けられじと、拔足して行ぬけどもぬけ拔巴「名」ぬけくえろ(拔九曜)を見よ。紋所の巴の一。その巴の形を黒くし、その間隙を白くあらはしたるもの。

ぬけに 抜荷「名」國の禁制を犯して密かに外國に輸出する商品、犯したる者は、磔刑・獄門などに處せられたり。密輸出品。(江戸時代の語)

ぬけにうり 抜荷賣「名」拔荷を賣買すること、又その人。前條參照。

ぬけぬけ 抜抜「貌」自動詞のぬく(抜く)を見よ。人に知られぬやうに、次第に抜け離るさま。盛衰死に殘りたる輩、北陸・南海より、ぬけぬけに來り著きければ、八笑入支度整ひければ、皆背ぬけぬけに出て行く。いかに智慧の足らぬやうなるさま。お石集「猿、木にのぼりて、海の中に山なし、身を離れて肝なしといひて、山へ深く入りぬ。此、ぬけぬけとして歸りぬ。」日あつかましきさま。しらじらしきさま。重帷子「侍の、ぬけぬけと、よう、嘘つかんす」。

ぬけぬけ 抜抜「名」抜け落ちたる齒。ぬけぬけ 抜船「名」次條を見よ。各番を定め、役船にかかりを船の、効かに抜け出て、所用を達すること。日たうぶつぬけぬけ(唐物拔船)を見よ。日ぬけぬけ(拔船)に同じ。一代男室(ひは西國第一の漢、遊女も、昔にまさりて、……浮世の事は仕舞うた屋の金左衛門をさそひて、同じ心の瓢金玉(ツ)ぬけぬけを急がせ、拔船を使ふ(句)日抜船(ツ)をなす。日拔船(ツ)をなす。(遊船の語)色道大驚「拔船つかふともいふ。拔船(ツ)と同じ事なり。番番を定め、役義にかかり居る舟の、さしぬけて所用を達するなどを、

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぬけ 抜抜「名」書き落したる文字。脱字(ツ)落字。

ぬけぼん 抜本「名」はほん(端本)に同じ。ぬけまる 抜丸「名」平治物語に見ゆ。平氏相傳の太刀の一。俗に、忠盛の、池殿(ツ)に畫疵してありし時、池より大蛇上りて、忠盛を呑まんせしに、枕頭に立ておかれしこの刀、鞘より抜け出て、大蛇に向ひしため、大蛇、恐れて池に沈みしより、忠盛の命名せしといふ傳ふ。

ぬけまわり 抜參脱參「名」家を抜け出て、密かに社寺に參詣すること。江戸時代に、諸國の老若男女、親又は主人にも告げず、密かに家を抜け出て、先を爭ひて、伊勢參宮せしこと、大抵五六十年目ごとに流行し、その度ごとに、種種の怪説世上に言ひふらさるるを常としたり。おかげまわり。五人女「八月十一日立(ツ)に拔參を、この道すがら契をこめ」舞衣「拔參の介抱して、天龍の川風に、新しき笠を取らしたる」。

ぬけみち 抜道「名」街道以外の近みち。うらみち。問道。日にげみち(逃道)に同じ。實我虎「何處ぞに抜道あつて、助かり出て」日いひぬけの手段。三代男「自然の時の抜道を思ひ、隠義(ツ)はしやと思へど」。

ぬけめ 抜目「名」抜け落ちたる處。缺けたる部分。もれ。脱漏。缺陷。夫木山「賤公の處は茅の抜目より丸く漏るる春の雨かな」日注意の足らぬ點。心のゆるみ。てぬかり。ぬかり。油斷。失策(多くは打消の語を伴ひて用ふ)新版敬文「目から鼻へ抜目の無い女主人」浮世風月「萬事抜目なく奉公を勤めて」。

ぬけもの 抜物「名」ぬけに(拔荷)を見よ。掠め取りたる物。ぬすみのもの。「じ。ぬけもの 抜者「名」のけもの(除者)に同じながら、それを買ふこと、又その人。けいずかひ。

ぬけもんく 抜文句「名」ぬけに(拔荷)の内、赤(短冊牌二枚以上ありて、他は皆

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

ぬけやく 抜役「名」花合(ツ)の手役

かす牌なるもの、短一(短冊牌一枚の他は、皆かす牌なるもの、十一(ツ)十點牌一枚の他は、皆かす牌なるもの、皆素(ツ)手牌七枚とも、かす牌なるもの、四種の場合、點數十八點を超える時は、褒美として、競抜者より、一貫づつを受くる特權を與へ、又、若し三人にて行ふ場合に、その内の二人共に拔役を所持し、その點數各八十八點に達せざる時は、その手役は、自然消滅に歸するものとし、これを吹消(ツ)といふ。

ぬける 抜ける「動下」自ぬく(抜く)の口語形。日魂奪はる。夢中になる。恍惚とす。一代男「織田の縮緬・貴族に著せたらば、ぬけるほど好き羽織ならん」。

ぬけちち 拔露地「名」拔道なる露地。根南志具集「どぶ板厚うして、足音高く、拔露地狭うして、小便流る」。

ぬけわらひ 拔笑「名」いかにも愚めきて笑ふこと。ばからひ。しれわらひ。

ぬけあき 抜餌「名」動(ツ)かい(沙蠶)に同じ。「はしき琴(古語)」。

ぬこと 瓊琴「名」玉にて飾りたる、うると天(ツ)の瓊琴(句)神代にありたりといふ瓊琴。「古語」馬大穴半運(ツ)神……その妻(ツ)須世理昆實(ツ)を貢ひて、即ちその大神の生太刀(ツ)生弓矢(ツ)またその天の沼琴(ツ)を取持たして、逃げ出でます時に、その天の沼琴、樹に拂(ツ)れて」。

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅



ぬさ 奴佐幣麻「名」願麻(ツ)即ち事を乞願ぐために奉る布帛の義といふ。神に祈るとして奉る物、又祓(ツ)に出す物。上古は、木綿麻をそのまゝ用ひしが、後には、綴りたる布帛を用ひ、又遂には、紙をも用ひて、これを五色に染め、もしくは白色のまま、木竹などに描みて奉ることとなり。又、古旅

ぬし

「たとひ主ある人にてあられ、又、いかなる女院姫宮にてもまします、一夜の程の契を、百年の命に代へんは、何か惜しからん」

主強く定まる【句】次條に同じ。【古語】右京太夫集、ぬしつよく定まるべしなど聞きし頃」

主強くなる【句】夫定まる。【古語】源氏、ぬし強くなるとも、かはらず打解けぬべく見えしきまなるを頼みて」

主忘れぬ【句】さびうめ（飛梅）に同じ。【本語】一夜の松の嵐に御夢をさされ、主忘れぬ梅が香に、昔の春を思召し出すとも、昌泰の年の末に、現人神（ついで）とならせたまひし心づくしの御旅寝までも」

ぬし塗師【名】ぬりし（塗師）の略。ぬりものし塗物師に同じ。七十一傳人歌合「ぬし。しほれども油がちなるふる漆ひることもなき袖を見せばや」

ぬし弩師【名】どし弩師に同じ。

ぬし主【代】第二人稱の敬稱。きみ。あな。た。（後世は、特に女より男に對して用ふ）ぬしさま主様参照。幸甚「我がぬしを酔はし奉るも、心ありや」天の鶴鳥「ぬしの新地がよひも、……段段の御異見」

ぬし虹【名】（の）虹を見よ【に】虹を云ふ。【東國の古の方言】萬葉「伊香保のやさかの井出に立つぬじのあらはるまてにさねをさねてば」

ぬしから主柄【副】その人の品位次第にて。【古語】榮花「和歌は、ぬしがらなんをかしさは勝る」

ぬしさいく塗師細工【名】漆にて、細工を施すこと、又その細工を施したる品物。狂言參勤六「ぬし細工を致し、世を渡る者でござるが」

ぬしさま主様【代】女より男に對していふ第二人稱の敬稱。代名詞のぬし（主）参照。【江戸時代の語】會場胸中「さらさらと帯は裂けても、主様と姿が間は、よも裂け」

ぬすめ

所有す。極端反響某、嫁に申し受け、この伴左衛門に縁邊（えんぺん）し、七百町を主づかんと、あてはめておいたもの。俳諧新選集「古家に皆主づかぬ飛騨（ひえ）かな」

ぬしどの主殿【代】ぬし（主）の敬稱。宇道善賢菩薩……坊の前に立ちたまへり。聖徳太子、泣く泣く拜みて、いかに、主殿は拜み奉るやといひければ」

ぬしはる主張る【動四自】その土地の地主となりて、權勢を張る。

ぬしはる塗師風呂【名】塗りをしたる室。物を入れおき、密閉して乾すための室。

ぬしへいろう塗師平六【名】能の狂言の一。塗師細工を渡世とする者、活計のために、越前國北之莊（きたのむら）なる平六といふ弟子をたよりて下り、平六の妻、夫の職業の、師匠に妨げられて衰へんことを憂ひて、夫は既に世を去りたりと偽りしより、平六は、久しぶりの面會はしたけれど、止むを得ず幽霊となりて、話を交ふる由に作れるもの。

ぬし沼島沼嶋【名】（地）淡路島の南側に在る島。周圍二里六町。全島、一村を成して、沼島村といふ。古は「野島」と書き、又、武島といふもいへり。萬葉朝風に梶の音聞ゆみけつ國野島（ののしま）の海子（うみ）の船にしろあるし」

ぬしや塗師屋【名】塗物を造り、又は商ふ家、又その人。狂言早蕨「このあたりに住むぬしやちや……某は、日本一の早漆でござる」

ぬしろ停代【名】（地）のし（能代）を見し。すき野世【名】のすき野世（の）に同じ。【古語】起「五百箇野世、イホツヌススキ」

ぬすたつ盗立つ。盗起つ【動四自】盗み立つ義。鷹狩の時鷹に追はれて、草の蔭などに隠れたる鳥、ひそかに飛び立ちて逃る。定家集「三百箇（さひやく）散降る交野（まの）のみ野の小夜（よ）衣ぬす立つ鳥を知らぬ若鷹（わがたか）」

ぬすひと盗人【名】ぬすびと（盗人）の音便。

盗人せぬは氏神ばかり【句】世に

ぬすめ

は、廉潔なる人の無き形容。【諺語】ぬすつといぬぬ盗人犬【名】ぬすびといぬ（盗人犬）の音便。

ぬすつとこんじやう盗人根性【名】ぬすびとこんじやう盗人根性の音便。

ぬすつとこんじやう盗人上戸【名】ぬすびとこんじやう盗人上戸の音便。

ぬすつとだけだけ盗人猛猛【形二】ぬすびとだけだけ盗人猛猛の音便。

ぬすつとね盗人猫【名】ぬすびとね（盗人猫）の音便。太師葉がくれにぬすつと猫や葡萄（ぶどう）

ぬすつと盗人【名】ぬすびと（盗人）の略。

ぬすつと盗人花【名】（種）おきななぐさ（菊草）に同じ。

ぬすつと盗食む【動四他】鷹狩の時、鷹が、その捕へたる鳥を、獵人のものに持ち來らずして、直ちに食ふ。

ぬすびと盗人【名】（盗）を行ふ人。どうばう。ぬすつと。ぬすつと。盗賊。

ぬすびと盗人【名】ぬすびと（大盗人）を罵りていふ語。おほぬすびと（大盗人）参照。枕「いみじきぬすびとかな。なほ、えこそ拾つまじけれ」

盗人が犬に食はれた【句】己に心やましき所ある者は、他より害を受けても訴ふること能はざる譬。【諺語】盗人が盗人に盗まれる【句】（誰の）盗人が誰に盗まれるに同じ。【諺語】盗人といへば手を出す【句】盗人と咎めたる時、抵抗する者は、却って、盗人たることを證明するものなり。【諺語】盗人と智者の相【句】は同じ【句】人は、その相貌のみによりて、善惡を速断すること難し。【諺語】沙石集「盗人と智者の相は同じといへり。舍利弗（しりふ）は昔の盗人なり。智慧を以て盗（ぬす）を能くするなり」

ぬすびと

よ損の上の損を致したと。【諺語】盗人に追銭（おしぜ）【句】次條に同じ。盗人に追（おし）を打つ【句】金を盗みて逃げ行かんとする盗人に、盗まれし人の、わざわざ更に金を増し與ふ義。損害を受けたる上、更に損害を被る。【諺語】甲陽軍鑑「下劣の輩に、盗人に追を打つと申す儀ならん」

盗人に鎗（や）【句】次條の略。【諺語】盗人に鎗（や）を預く【句】次條に同じ。【諺語】源義記「頼朝を東國へ流し遣しけるは……噲へば、盗人に鎗を預けけるは……」

盗人に糧（か）【句】敵に糧を賣すに同じ。【諺語】

盗人に金の番【句】直ちに盗み去らるべき譬。猫に有の番。【諺語】盗人に藏の番【句】前條に同じ。【諺語】夕霧阿波の鳴瀬「祈りも除けたい戀の敵持て居て當てがふは、盗人に藏の番、磁石に針」

盗人逃げての向鉢巻（むかひまき）【句】臆病者の、事の済みたる後に強がる形容。【諺語】

盗人にも三分（さん）の理あり【句】善からぬ事を行ひても、辨解だけはなし得るものなり。【諺語】

盗人の後（の）の棒乳切木（ぼうにきぎ）【句】時機に後れて効なき譬。六日（むいか）の菖蒲、十日の菊。【諺語】

盗人の上前（の）を取る【句】不當手段にて得し利益を横合より、うまうまと騙取す。【諺語】の甚しき譬。【諺語】

盗人のかへさ怨（うら）【句】次條に同じ。盗人の逆怨（さかうら）【句】不正を行ひながら、あらはるれば、却って、損（ひ）を、罰しなどする者を怨む。【諺語】

盗人の提燈持（ていとうもち）【句】悪人の手先となる譬。盗を補助する譬。

盗人の取壊（とりくわ）【句】火災の害は、盗賊の害

より甚し。〔諺語〕

盗人の隙(マ)はあれども、守手(マ)の隙は無い〔句〕盗人は、一時の機會につけこむのみなれど、これを防ぎ守る者は、一刻も油断なりがたし。〔諺語〕

盗人の寢(マ)は、次條の略。〔諺語〕

盗人の寢(マ)も、當(マ)が有る〔句〕

『盗人は、晝の間寝て、夜起きて盗むよりいふ』たくらむ事ありて、その準備として行ふ。〔諺語〕

盗人を捕へて、縄を縛ふ〔句〕準備を怠り、その場に臨みてあわてふため

く。〔諺語〕

盗人を捕へて見れば、我子なり〔句〕

『もと、大筑波集にある「切りたくもあ

り切りたくもなし」に對する附句、

愛情にひかされて、處罰しかねる。〔諺語〕

盗人を見て、縄を縛ふ〔句〕「盗人を

捕へて縄を縛ふ」に同じ。〔諺語〕

ぬすびとあさり 盗人あさり〔名〕盗人

などを採り索むこと。榮花「ぬすびとあ

さりすべし」など云ふめれ

ぬすびとぬ 盗人犬〔名〕盗食(マ)を

する犬。ぬすつといふ。

ぬすびとかくし 盗人隠〔名〕基石にて

行ふ、一種の遊戲。

ぬすびとくに 盗人國〔名〕盗人の住め

る國。無草紙(大國)日本草原をば、盗人

國と申して、人の心が人間にあらず

ぬすびとくじやう 盗人根性〔名〕盗

を行ふ根性。ぬすみこころ。盗心(マ)。

ぬすびとじやう 盗人上戸〔名〕酒を

も甘き物を嗜む性質、又その性質の人。

ぬすつとじやう。日(マ)そらじやう(空上

戸)に同じ。

ぬすびとただけ 盗人猛猛し〔形〕

盗をしながら、すこしも恐れず、平氣な

り。ぬすつとただけし。日(マ)惡事を平氣

ながら、すこしも恐れず、平氣なり。ぬす

とただけし。義經千本櫻「盗人猛猛しい

と、その高ゆすり喰はぬ、喰はぬ」

ぬすびとだまし 盗人魂〔名〕盗人の

大膽なる心。義經「ぬすびとだましひの程

あらはれて、いと恐ろしといふ沙汰に

てぞ有りける」

ぬすびとねて 盗人猫〔名〕盗食(マ)を

する猫。ぬすつとねて。

ぬすびとあし 盗人〔名〕おにのやがら

(鬼矢鈴)に同じ。日(マ)次條に同じ。

ぬすびとばき 盗人秋山菜豆〔名〕「植」

豆(マ)科に屬する多年生の草。莖は木様

を呈して、高さ三四尺に達す。葉は三小

葉より成れる三出複葉にして、各小葉は

全縁の卵狀

廣披針形に

して、鋭頭

を有す。八

月頃、淡紅

紫色の蝶形

花、總狀花序をなし

て開く。果實は扁平半月形の莢にして、

通常二箇の種子を藏し、その間にくびれ

あり、表面に小刺密生す、各地の山野に自

生す。ふちかんに生ず。やぶばき

ぬすびとばな 盗人花〔名〕「植」おきなぐ

さ(翁草)に同じ。

ぬすびとやど 盗人宿〔名〕盗人のかく

まひ置く家。かひず。

ぬすびとれんが 盗人連歌〔名〕能(マ)の

狂言の一。連歌の會の當番になりたる貧

乏人の、その設をすべき策に窮し、仲間の

者一人を誘ひて、人の家に忍び入り、物を

盗まんせしに、その家の主人も、連歌を

好み、又その盗人の顔を見知りゐて、互に

唱和の末、馳走引出物の款待をも得て歸

りし由を作れるもの。

ぬすまふ 盗まふ〔動四他〕ぬすむ(盗む)

日(マ)の延。「古語」萬心(さへ奉る)れる君

に何しかも言はずて言ひきとあが竊む

まはむ」同「山河に筈」を伏せおきて守

りあへず年の八とせを吾が盗まひし。日(マ)

辛うじて暇を得。閑を偷む(被役形と

してのみ用ふ)「古語」萬馬御いとまな



(ぎはとびすぬ)

ぬすみ 盗〔名〕ぬすむこと。ものどり。

日(マ)盜強盜せざれば、千筋の繩は附くと

も、恥ならず

盗する子は憎からで、繩掛かくる人

が恨めしい〔句〕親の目には、惡性の

子もかはゆし。〔諺語〕

盗する者は、手無き者に生る〔句〕因

果應報の恐るべき。〔諺語〕

ぬすみあし 盗足〔名〕足音のせぬ様に

歩むこと。ぬきあし。室町千疊敷「通れん

通れんと、そりり、そりりの偷足」

ぬすみいだす 盗出す〔動四他〕盗みて、

外に出出す。ぬすみだす。ぬすみいづ。

ぬすみいつ 盗出づ〔動下二他〕前條に

同じ。伊勢、女のえうまじかりけるを、年

を經てよばひわたりけるを、辛うじて盗

み出でて

ぬすみきき 盗聞盜聴〔名〕竊かに立聞

(マ)すること。側聽。

ぬすみくひ 盜食〔名〕物を盗みて食

ふこと。人に隠れて、物を食ふこと。日(マ)

めさばう(豆泥坊)に同じ。柳屋夜半に

君ひとり行くに盗食」これは、在原業

平の事をいへる句にて、伊勢物語の「風吹

けば沖つ白浪たつ田山夜半にや君がひと

り越ゆらん」といふ歌につきていへり

ぬすみこころ 盗心〔名〕ぬすびとくじやう

(盗人根性)に同じ。關原用、盗心のある鼠

の宿しれたる不承(マ)に

ぬすみくらんず 盜御覽す〔動佐變他〕

ぬすみ見る(盗見る)の敬語。兼寛西園寺の

入道おとどの末の御女……を、忍びてぬ

すみ御覽にて、わく方なき御思、年に添へ

てやむことなうおはしつれば

ぬすみくらんず 盜御覽(名)將某の駒を

積み重ねおき、音のせぬやうに一つづつ

抜き取り、多く抜き取りえたる方を勝と

する遊戲。

ぬすみだけ 盜竹〔名〕表面よりは見え

ぬにょりていふ「簀子」の裏に横たへ

打附けたる竹。日(マ)盗出すの略。

ぬすみに 盗に〔動〕ひそかに(竊かに)に

同じ。「古語」散末初箱のおき残したる

白菊を露やぬすみに移るはすらん」

ぬすみはみ 盜食〔名〕ぬすむ(盗食)に

同じ。「古語」定家朝臣三百萬、春の日の長

追しつるはし鷹や心ならずもぬすみはみ

する」

ぬすみみ 盜見〔名〕ぬすみ見ること。盗

に見る。人に隠れて、又は横目など使ひ

て見る。盜視(マ)。

ぬすみもの 盜物〔名〕盗み取りたる品

物。盜品。贓品。贓物。武玉川「熊坂の長

刀いづれ盜物」お染久松色販賣「この義光

は根が盜物さる人に頼まれて、この油

屋へ、百兩の質に入れ」

ぬすみよみ 盜讀〔名〕ひそかに讀むこ

と。他人に宛てたる手紙などを、隠れて

讀み、又は他人の讀みたる手紙などを、側

より讀むこと。

ぬすむ 盜む竊む偷む〔動四他〕他人

の所有物を、ひそかに取る。日(マ)人に隠れ

て、ひそかに行ふ。目を盗む。ごまかす。

日(マ)得がたき事を、さし繰りて得。雲州消息

「鯉賊之花、堰堤之水、尤可賞歎」之秋也。

仍偷閑欲「龍向一之處」重頼玉骨はぬす

むむい

ぬた 妙〔名〕ぬたはだ(妙肌)の略。

ぬた 饅頭〔名〕魚肉及び野菜などを、

酢味噌にて和(マ)へたる食品。適宜の芥

子(マ)などを加へたるもあり。ぬたあへ。

ぬたなます。のた。

ぬた(名)猪の臥所。ぬたうつ(ぬた打つ)

参照。「古語」夫木、君戀ふと猪(マ)の刈藻

(マ)より寐ざめしてあみけるぬたにやつ

れてぞ經る。日(マ)うた(歌)を、音の相近き

より、假(マ)にかけていふ。拙き歌を嘲り

ていふ語。「俚語」

ぬたを放(マ)く〔句〕てきばきと行動

せず。ぐづぐづす。元朝語今日、何者に

てもあれ、ぬたをこく者あらば、一矢も

つて參候する」

ち又は流る。盛衰記「岩泉咽而」

ぬの布「接頭」(「建」平らか水平などの意。「布竹」「布羽目」(「建」)「布丸太」)

ぬのいじ布石「(名)布石敷に用ふる石」

ぬのいじ布石敷「(名)長手に据えつけた敷石」

ぬのうり布賣「(名)布を賣ること、又その人。ぬのや。御伽草紙(給草紙)「布賣におほせし處は、南方補陀落」(又)世界の觀音の淨土なり」

ぬのおび布帯「(名)布にて作りたる帶。和名「白布帶、沼能於比」

ぬのかたきぬ布肩衣「(名)布にて仕立てたる肩衣。舊葉、綿も無き布かたきぬの水松(名)のごとわわけさされる」

ぬのかたきぬ布帷子「(名)布にて仕立てたる帷子。白狐汗取、大口布帷」

ぬのかは布皮「(名)的の後に立つる幕。六幅(名)なるを普通とせり」

ぬのかきぬ布狩衣「(名)布にて仕立てたる狩衣、著聞、濃き青の布狩衣」

ぬのきせ布著「(名)漆器を造るに、堅牢ならしむるため、豫め素地(名)に麻布を貼りつけたる上、塗り上ぐること、又その造り方の漆器。「方なる漆器」

ぬのきせもの布著物「(名)布きせの造りたる著物。ぬのきせもの。舊葉、荒妙(名)の布衣をだに著せがてにかくや嘆かむせむすべを無み」

ぬのきせ布切「(名)布のきせはし。狂言解出伏「布切七八寸、まっ黒に染め」

ぬのく奴國「(名)「地」なつ那津を

ぬの布子「(名)布にて仕立てたる婦人の著物。和名「茶見」(名)公は、布子に拾羽織股引で濟むから、家(名)へ行(名)くにも及ぶめえ」

ぬのこおもて布子表「(名)布子の表に用ぬのこ布漣布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのこ布漣「(名)豆腐、餡などを、布にて漣すこと、又その物(絹漣に

ぬのころも布衣「(名)ぬのきぬ(布衣)に同じ。拾遺「基長中納言、東山に花見はべりけるに、布ごろも著たる小法師して、誰とも知らせず取らせはべりける」

ぬのさうじ布障子「(名)ぬのしやうじ布障子の約。「古語」昔伊豫籠(名)かけ渡して、布さうじ張りて」

ぬのさうじ布差繩「(名)布にて作りたる差繩。東鑑「布さしなは七方、白布二百段」

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など

ぬのさうじ布晒「(名)色を白くせんために、布を洗ひて、日に晒すこと。「長唄」越後獅子」など



(ぬのしらぎ)

ぬのこはきに過ぐる織物を、探みて柔かならしむる機械。ぬのもみき。

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのばかま布袴「(名)布にて仕立てたる袴。著聞「布袴をぞ著たりける」

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬのびき布引原「(名)「地」まきのほ(牧野原に同じ)。

ぬめが

に属する軟體動物。殻は蛤(かき)のに似て、長さ二寸、殆ど圓く、質厚く、縁に細齒あり。表面は白色にして、褐色の模様ありて、縦横布目状の隆起をなし、内面は白色、肉柱痕は紫色を呈す。我國南海に産す。

ぬめがみ 布目紙(名) 質(さ)の目を隠さんが爲に、布を蔽ひて流き、随ひて、その面に布目のあらはれたる紙。現時は、多くの紗を用ひ、紗漉(さ)と呼ぶ。羅紋紙。

ぬめがうん 布目象眼(名) 象眼の一種。象眼すべき部分に、布目を彫りつけ、その上に、薄き金屬をかぶせ、打ちて、布目に嵌入せしめ、地板と象眼との離れぬやうにするもの。

ぬめめり 布目塗(名) 表面に布目の紋様をあらはしたる漆塗。明治十年頃、加賀國金澤の人鶴田某の發明に係り雅致あり。

ぬめのみき 布揉機(名) ぬめやしき(布ぬめ)や布屋(名) 布(名)を賣ることを業とする家又その人。

ぬめやく 布役(名) 昔、甲斐國にて、武田氏が、木綿布一段ごとに、七分五厘づつ課せし税。

ぬめかま 奴袴(名) 指貫(さし)に袴奴(即ち袴袴)の字を宛てたるを顛倒して誤讀せる語といふ。さしぬき(指貫)に同じ。麻呂(まろ)奴袴の棧(せき)取り、さやめき入れければ。

ぬめたま 射干玉(名) 射干(かつかん)の果實。圓くして黒し。うばたま。

ぬめたまどり 射干玉鳥(名) 動(動)ほさ(さ)子規の異稱。

ぬめたまの 射干玉の「枕」ぬめたまは、黒きものなるより、くろ(黒)にかけてもいたき態にはあつたりけり。黒きを暗黒の意に轉じて、よ(夜)及びゆべ(夕)にかけていふ。黒玉(こくぎ)が家路ややまどほきをぬめたまの夜わたる月にきほひあへむかも。同「ぬめ玉のゆふべにならば」目暗黒の夜より、更に轉じて、夜に縁ある、つき(月)いめ(夢)ゆめ(夢)に

ぬめのみ

かけていふ。黒玉(こくぎ)はたまの月に向ひてほととぎす鳴く音はけし里遠みかも。同「わがせこがかく戀ふれこそぬめたまのいめに見えつついねらえずけれ」増鏡「若かりし世に見聞きはべりし事は、この年の頃、ぬめ玉の夢ばかりだになくおほはれて、何のわきまへか待らん」。

ぬめのみ ぬめ(名) 植(き)き(き)鬼白(き)に同じ。ぬめり(名) 王孫(おうそん)黄孫(わうそん)「植(き)つ(き)はねさ(き)波根草(なねくさ)に同じ。和名王孫、一名黃孫、沼波利久佐。此間云、豆知波利」。

ぬめ縫(名) 縫ふこと。ぬめ縫(縫目)に同じ。黒云春風に霞の衣はころびてぬひさへ見ゆる八重櫻かな。ぬめひ(縫)取の略。

縫(縫目) 縫(縫目) 縫ひたる縫のちめ。ぬめ。ぬめおほつかな縫の綴目やまたからんまだ綻びぬ山櫻かな」。

ぬめ奴婢(名) 下男と下女と。めしつかひの男女。どひ。

ぬめ野火(名) のび(野火)に同じ。「古語」黒雲「春野(はるの)に焼く野火と見るまで燃ゆる火をいかにと問(と)ふ」。

ぬめあはす 縫合はす「動下二他」縫ひて、兩方の合ふやうにす。合はせて縫ふ。

ぬめいぞ 縫糸(名) 縫ふに用ふる絲。

ぬめいれ 縫入(名) 縫取(縫)を施してあること。井筒(いづか)平河内通「この縫入の染小袖、なんと上著に似合うたか」。

ぬめいんてん 繡應帝(名) 色色に染めたる獸毛などに、縫取(縫)の施してある應帝(おうてい)。

ぬめおひ 縫帶(名) 縫取(縫)を施してぬめおひきや縫懸鞘(名) 刀劍の鞘の、革又は錦などに縫ひ包みであるもの。

ぬめかた 縫方(名) 衣服などの仕立方。

ぬめかへ 縫返(名) 縫ひかへすこと。ぬめなほし。

ぬめかへしおひ 縫返帶(名) 縫ひかへしたる帶。三代男源氏の襟裏、鈍子のぬめかへし帶。

ぬめかへす 縫返す「動四他」改めて

ぬめきり

縫ふ。縫ひなほす。ぬめきり(縫切)をなす。ぬめきりあみ 縫切網(名) 旋網(せん)類に屬して、囊の有一種の網。鰻(うなぎ)に屬して、囊の有一種の網。鰻(うなぎ)の縁(えり)小鯖などを捕ふるために、多く長崎邊にて用ひ、夜篝火を焚きながら使用する。たきいれあみ。

ぬめくき 縫釘(名) 木材、鐵材等の接合を附けず、直ちに旗竿に縫合すること、又その轡。

ぬめくたじ 縫下(名) 帆の一部。

ぬめぐるみ 縫包(名) 外面より縫ひて、中に包むこと。芝居にて、犬・狐・猿猪などの動物に扮する者が、全身に著かぶつて、その動物に擬する者、布製の袋。八笑(はっしょう)頭(く)武六(ぶく)は、縫包の狐になるのだ。縫包に、乳(ち)を附くる代りに、草又は布の類を一樣に縫ひつけて、それに竿を通すやうにしたもの。甲斐の武田家にて始めしものといふ。

ぬめごのみ 縫好(名) 縫方(縫)又は縫取(縫)のえりごのみ。一代女「無用の女郎衆」ばかり訪ね寄りに當世衣裳の縫好」。

ぬめこみ 縫込(名) 縫ひこむこと、又、縫ひこみたる部分。

ぬめこむ 縫込む「動四他」布帛を縫ひあはせて、その布帛の端を、縫目の奥に隠るやうになす。ぬめこむ(縫代)参照。

ぬめさじ 縫止(名) 縫ひかけて、中途に止めおくこと。

ぬめさじもの 縫止物(名) 縫ひかけて中途に止めおきたるもの。落葉(らくえつ)夜べのぬめさじ物。

ぬめさす 縫止す「動四他」縫ひかけて、中途に止む。落葉(らくえつ)縫ひさして臥したまうて。

ぬめさきに 縫様に「副」縫ひ貫くと同時に。保元「弓手(ゆき)の草摺を、縫さきにぞ射切つたる」落葉(らくえつ)「弓手(ゆき)の草摺縫さきに射込まれたる」。

ぬめし 縫師(名) 物を縫ふことを職業とする人。ぬめものし。

ぬめじ

ぬめじこと 縫仕事(名) はりし(針仕事)に同じ。糸(いと)多(おほ)縫(ぬい)目(め)に、縫仕事、御袴(ごはかま)が出ますの」。

ぬめじめ 縫締(名) いせに同じ。

ぬめじろ 縫代(名) 布帛を縫合はする時、その布帛の端の、縫込になるべき部分の幅。「縫代三分」。

ぬめずり 縫摺(縫摺) 縫取(縫)と摺(すり)とを交へ施すこと、又これを施したる布。落葉(らくえつ)縫摺の直垂(ちかた)に、赤絨(じやうじやう)肩白(かたしろ)の鍔(つば)を著たり。同。

ぬめだい 縫臺(名) しろう(刺繍)に同じ。

ぬめたが 縫違(名) 縫ひ方を誤ること。縫違(ぬい)たがらばこそ、裏を見たらん縫ひたが(縫)の人の、げに直さめ」。

ぬめづかさ 縫殿寮(名) ぬめづのつかさ(縫殿寮)に同じ。ちつく。

ぬめつく 縫附く「動下二他」縫ひて、綴合はす。一代男「著物(もの)を縫ひつがせて」。

ぬめつく 縫續く「動四他」縫ひて、つぎの縫取(縫)を施すこと。若風(わかふう)白(しろ)清(きよ)かなる唐綾(からやま)の綾物に、あだなる露草(つゆぐさ)の縫(縫)づくし」。

ぬめつけもん 縫附紋(名) 描きたる紋所を切り抜きて、他の布帛に、絲にて縫ひつけたるもの。

ぬめつぶじ 縫潰(名) 縫ひつぶすこと、又、縫ひつぶしたる布帛。

ぬめつぶす 縫潰す「動四他」殆ど生地(し)の見えぬ程に刺繍す。

ぬめどの 縫殿(名) 縫殿寮に屬して、裁縫(さいほう)の事を掌(つかさど)りし所。落葉(らくえつ)縫殿より、御藥玉(ごりやくだま)の参らせれば」江次(えいじ)黒絲(くろいと)所在(そこ)三采(さんさい)町北(まちきた)縫殿別所也」。

ぬめどののかみ 縫殿頭(名) 縫殿寮の長官。その下に、縫殿助(ぬいどのすけ)縫殿允(ぬいどののり)縫殿屬(ぬいどのりやく)ありたり。ぬめのみ。

ぬめどののつかさ 縫殿寮(名) 古中務(なかつたか)省に屬し、仕官の女王(じやう)命婦(めいふ)宮人の名帳(みやのなぢ)考課(こうこ)及び衣服の裁縫(さいほう)を掌(つかさど)るものし。

ぬま・しゆいち 沼間守一〔名〕〔人〕江戸
の人。徳川幕府に仕へ、夙に長崎に赴き
て、海陸の兵法を學び、差圖役頭取より、步

ぬまぜり

兵頭並となる。鳥羽伏見の敗報江戸に達するや、主戦論を唱へ、用ひられず。去つて、奥州の野に轉戦し、捕へられて、江戸に護送せらる。明治五年以後、大蔵司法の兩省に歴任して、歐米に航し、歸朝後、元老院議員となり、傍ら櫻鳴社を創設す。十二年民間に下り、大隈重信等と改進黨を組織し、東京府會議議長となり、横濱毎日新聞社長を兼ねしが、二十三年歿す。年四十八。

ぬまぜり 沼芹(名)「植」さばぜり(澤芹)に同じ。

ぬまた 沼田(名)「沼」の如く泥深き田。ぬまた 沼田(名)「地」上野國利根郡にある町。土岐氏の舊藩地。明治初年設置の縣の一。四年上野國舊沼田藩の地に立てしもの。後、群馬縣に入る。

ぬまたいこん 沼大根(名)「植」菊科に屬する草。莖は高さ三四尺に達し、葉は大なる卵形にして、鋭頭と鋸齒とを有し、對生す。夏季、帶白色の花、莖頂に頭狀花序に開く。各地の池澤中に自生す。

ぬまたじやう 沼田城(名)上野國沼田町に在りし城。もと豪族沼田氏の居城にて、戰國の頃には、北條上杉・武田の諸氏、屢ばこれを争ひ、天正十年、眞田昌幸(幸)の手に歸す。關ヶ原の戰後、昌幸の子、この城を築治し、曾孫信就(就)の時、一旦廢城となり、元祿十五年本多正永再修して居り、後、黒田氏を経て、土岐氏の治城となり、明治維新に至る。

ぬまたゆきよし 沼田順美(名)「人」醫者。字は道宣。樂水堂と號す。上野國の人。一時武藏國川越に在りて、醫を業とせしが、明を失し、江戸に來り、湯島に住む。嘗て林述齋の門に入りて、儒學を修め、又、國學に通ず。教長月風(芳)を著して、本居宣長を駁撃し、又、國意考辨安を著して、賀茂眞淵を排斥し、名聲當時に鳴る。嘉永二年歿す。年五十八。

ぬまたらう 沼太郎(名)「動」ひしく(ひ)鰻に同じ。猿蓑史邦「廣澤やひとりしぐる沼太郎」

ぬまづ

ぬまづ 沼津(名)「地」駿河國駿東(郡)にある町。狩野(川)の右岸。静岡市の東北約十六里。鐵道東海道線の停車場あり。舊東海道五十三次の一。水野氏の舊藩地。

ぬまづがき 沼津垣(名)「東海道沼津三島邊の人家に多きによりていふ」あじろがき(網代垣)に同じ。

ぬまづじやう 沼津城(名)駿河國沼津町の本市の北に在りし城。天正七年武田勝頼の將高坂昌宣(分)の築造に係り、同十年以後、徳川家康の手に歸し、松平康親・中村一榮・大久保忠佐相次いで在城し、一旦廢城となりしを、安永六年水野忠友再修して領有し、明治元年忠寛に至りて上總國に轉封す。

ぬまどくさ 沼木賊(名)「植」いぬさ(犬木賊)に同じ。

ぬまどらのを 沼虎尾・宿星菜(名)「植」櫻草科に屬する多年生の草。莖は圓柱狀にして、高さ一尺餘、葉は互生し、披針形にして全緣、夏、小白花、長さ四五寸の總狀花序をなして開く。各地の山野・水邊の濕地に自生す。ぬまはぎ、やなぎさう。

ぬまなみごさき 沼浪五左衛門(名)「人」伊勢國桑名の豪商。點茶を好み、樂焼を巧みにし、彩色釉畫をよくす。天明六年、幕府の召に應じて、江戸小梅村に窯を開く。世に古萬古(三)と稱す。萬古燒の祖。

ぬまはぎ 沼萩宿星菜(名)「植」ぬまどらのを(沼虎尾)に同じ。

ぬまはこへ 沼繁縷(名)「植」はなみつば(へ)花水繁縷に同じ。

ぬまはりお 沼刺蘭(名)「植」莎草科に屬する多年生の草。高さ三四寸乃至一尺に達し、葉は、單に、莖の下部に、茶褐色の小鱗片となりて存し、花は莖頂に、四分の穗をなして生じ、春夏の際、茶褐色を呈す。各地の沼地に自生す。

ぬまみつ 沼水(名)沼に溜れる水。金葉「葦根はひかつみもしげき沼水にわりなく宿るよはの月かな」

ぬまめ

ぬまめぐり 沼めぐり(名)「植」まづよひさ(待宵草)に同じ。ぬみつんはい(水金梅)に同じ。

ぬまよき 沼艾(名)「植」やまよき(山艾)に同じ。

ぬみくすね(名)「植」次條「に」に同じ。「古」ぬみくすり(名)「植」くこ(枸杞)に同じ。「古」ぬみくすり(名)「植」くこ(枸杞)に同じ。

ぬみん ぬみん(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめ ぬめ(名)「古語」和名續沼无毛乃の訛。「古語」和名續沼无毛乃の訛。

ぬめり

ぬめり ぬめり(名)ぬめること。なめらかなること。ぬめらぬらとする液。粘液。「蝸牛のぬめり」ぬめにまみること。名義抄「澤・メ・メ」ぬめにまみること。見よ「歌連歌などの平板綴弱なるを、俳人の嘲りていふ語。勅衣「五十三次の紀行は、あまねく人の言ひふるせと、多くは歌よみ連歌師のぬめりに、さよの中山に旅寝の詞を續け、字津の山のべの藁にまとはりて十國子(三)の淋しきは知らず」ぬめりたる滑歌の略。

ぬめりあり 滑歩(動四自)遊びある。うかれある。ぬめりあり。

ぬめりいづ 滑出づ(動下二自)ぬめりて動き出づ。なまめきて出て来る。横城「花の立木の、そのまにぬめり出でたる如くなり」

ぬめりうた 滑唄(名)萬治寛文の頃、江戸吉原より流行し、俠客などの唄ひたる一種の小唄。ぬめり(滑節)参照。吾吟集「今ぬめり歌、天下にはやること、四時(三)九つの眞盡になん有りける」歌舞伎夜居にて、傾城の出端(三)に、三味線・太鼓・摩訶(三)などを用ひ囉すこと。前記の小唄の節の名残なるべしといふ。ぬめり。ぬめりや参照。

ぬめりぐさ 滑草(名)「植」禾本科に屬する一年生の草。莖は叢生して、高さ約一尺に達し、葉は細長く、花は小穂相集まりて、長さ二三寸の圓柱形の穗をなし、八月頃帯緑色を呈す。各地の水邊・畦畔等に自生す。ぬめりや。ぬめりや参照。

ぬめりごち 滑牛尾魚(名)「動」ぬめりごち(風牛尾魚)に同じ。

ぬめりこむ 滑込む(動四他)ぬめりて入る。するすると入り込む。平家女護島「蚊帳」引き上げてぬめり込む」

ぬめりすぢ 滑筋(名)織物の模様などの、なまめきしやれたる筋。竹齋物語「肩に鹿子(三)のだんだら筋、腰に浮世のぬめり筋」

ぬめりだらちゆう 滑道中(名)道中

の、滑(ぬ)ににつれて行ふもの。吾吟我集
「太夫がぬめり道中など云へること、多かり」
「一代男」揚屋町にさしかかれば、……、
拔足のぬめり道中」

ぬめりづま 滑妻(名) うかれなまめき
たる妻。うかれづま。芭蕉「盛りしや花に
そぞろ浮法師(ふ)ぬめり妻」

ぬめりびゆ 馬齒寛(名) 「植」すべりびゆ
(馬齒寛に同じ。)

ぬめりふう 滑風(名) ぬめりたる姿。う
かれなまめきたる風體。曾我虎が勝「衣紋
(き)繕ひ、髪掻き撫て、虎に仕懸(し)ぬめり
めり風」

ぬめりぶじ 滑節(名) 滑順(ぬ)の節。
「一代男」是非なく立つて、花の都のぬめり
節、長い刀に長脇差、ぼつ込んで、おせき
よいさと唄へば」

ぬめりんず 絛綸子、絛綾子、滑綾子、光
綾子(名) 綸子の類にて、無紋なる絛物。
ぬめ。

ぬめりわたり 滑渡(名) ながれわたり(流
渡)に同じ。芭蕉「阿房の雲を渡ぐも、煤
拂のやかましぬめりに、蝸牛の、月一枚持
たても、浮世をぬめりわたりなるをや」

ぬめりをとこ 滑男(名) うかれなまめ
きたる男。めかしたる男。だうらくもの。
遊蕩兒。豐玉當世だてとて、遊女、ぬめり
男の、すぐれて夏の曇きに、裕單物な
ど著」

ぬめる 滑る(動四自) ぬめらかにてあ
り。なめらかにてあり。すべる。①なま
めく。めかす。意氣にてあり。廣義「手
を引きあうていざやぬめらう(い)いふ句に
夕顔の棚に生ひ添ふ山の芋」犬養遼「欄
(か)を握ればぬめりこそすれ(い)いふ句に、抜
いて見る身は鯉尾の刀にて」目うかる。
うかれある。のめくる。恨の助草子「夢の
浮世をぬめる。やれ、遊べや、狂へ、皆人」
④ぬめり(滑)を見よ「淨瑠璃作者の文
章に、縁語を多く連ね」

ぬめし ぬ文字(名) ぬじ(文字)は接尾
語「ぬすびと盗人」を云ふ。「女の語」宗長
手記「ここのと不辨をいへば、雑事録今

有ぬもじにともじせらるる」
ぬもり 野守(名) (名)のもり(野守)に同
じ。「古語」萬葉「茜さす紫野ゆき標野(ひ
)ゆき野守は見すや君が袖振る」

ぬやま 野山(名) のやま野山(名) に同じ。
「古語」萬葉「君に似る草と見しよりわが
しめし野山の淺茅(や)人な刈りそね」

ぬやまづかさ 野山阜・野山丘(名) 「ぬづ
かさ(野阜)を見よ」のやまづかさ(野山阜)に
同じ。

ぬら 野ら(名) のら(野ら)に同じ。「古
語」萬葉「あら野等に里はあれども大君の
しきまず時は都となりぬ」

ぬらくら 寝らく・寐らく(動自) ぬ(寝)の
連體形「ぬらくの延、さぬらく(さ寝らく)參
照」(古語)

ぬらくら ぬらくらにして、取留なき
さま。ぬらくらり。①ぬらくらに同じ。
ぬらくらへち ぬらくら口(名) 輕輕し
くしやべる口前。心中「庚申」今日、殿の
御成(なり)、旦那の御出世、過つけ、山の芋
から饅になりなされうと輕薄、ぬらくら
口に、饅の油、とろりと乗せ掛ければ」

ぬらくらなま ぬらくら仲間(名) の
うらなま(のらくら仲間)に同じ。和合人
「洒落と戯言(ず)て世を渡り、いつも鯉で
瓢箪をおさへたやうなぬらくら仲間」
ぬらくらもの ぬらくら者(名) ぬら
くらとして居る人。なまけもの。のらく
らもの。のら。

ぬらひ 濡(名) 火に縁あるやぐ(焼く)と
いふ語を、反對に、水に縁ある語に言ひか
へたるものといふ。或はぬらす(濡す)の
假體言か「嫉妬の心深き人。やきもち
やき。色道大體「ぬらひ、やき人の事なり
やきての名目を言ひかへたる分なり」

ぬらひよね 濡媚(名) 嫉妬の心深き媚
妓。色ごのみの遊女。三代男「あざ女ちち
み姿ぬらし媚」

ぬらす 濡す(動四他) 濡るるやうにす。
ぬれしむ。うるほす。①涙にて濡らす。
(歌などにて、多くは袖袂等の語を伴ひて
用ふ)千載「戀をのみしぐるる空の浮雲は

曇りもあへず袖ぬらしけり」②情事に
よりて、相手の心を動かす。色仕掛にて
迷はす。吉野郡女「威勢で成し、文(こ)て
ぬらし、色變(品變)へ、口説きしを」

ぬらす 動四他 「ぬるを見よ」髪などを
解けたるまにす。一説に、ぬらぬらと靡
かす。ひきぬらす引きぬらす「參照」(古語)
萬葉「おほならは誰が見むともかぬ玉の
あが黒髪を靡(ひ)して居らむ」

ぬらつく 滑つく(動四自) ぬらぬらと
ぬるさま。ぬめらか。なめらか。ぬるぬる。
ぬれぬれ。

ぬらり 滑(名) すべりて、しまりなきさ
ま。ぬる。俳諧「遠無名氏」かかる世に
ぬらりとしたる生海風(す)かな」

ぬらりくろり ぬらくらに同じ。俳諧古
選「雲散」四方の春ぬらりくろりてやるぢ
やまで」

ぬらりくろり ぬらくらに同じ。吉野郡女
「廣大名深草大納言、唐人分別ぬらりくろ
りの兼平(か)か」

ぬり 塗(名) 塗ること、又、塗りたる有様。
ぬりあぐ 塗上ぐ(動下二他) 完全に塗
る。(ぬる(塗る)②及び③の意に用ふ)八笑
人「左次(さ)さんが大骨を折って塗り上げ
たものを、お袋に見せたばかりで、おとす
事は無(な)え」

ぬりあげ 塗上(名) 塗り上ぐること。
①ぬらり(上塗)に同じ。女殺油地獄「不孝
の塗上、身上の破滅、思ひ廻せば、死ぬる
にも死なれず」

ぬりあじだ 塗足駄(名) 漆塗の足駄。平
塗、練色の衣(き)をうちかづきて、塗足駄
をはきて」

ぬりあふぎ 塗扇(名) 漆塗の骨を用ひ
たる、漆塗の板。ぬぐひいた。①に同じ。
②(はん)黒板に同じ。③に同じ。
ぬりいた 塗板(名) 文字を記し、何回
にても拭き消して、使用し得るやうにし
たる、漆塗の板。ぬぐひいた。①に同じ。
②(はん)黒板に同じ。③に同じ。
ぬりいた 塗板(名) ぬりこ(塗奥)

ぬりいへ 塗家(名) ぬりや(塗屋)に同じ。
ぬりいろ 塗色(名) 塗りに附けたる色
(塗色(いろ)などに對して)

ぬりうち 塗團扇(名) 兩面を漆塗に
したる網代(の)團扇。百日(ひ)賣(賣)青丹(し)
よし、丹や綠青塗團扇」

ぬりうづば 塗空穗(名) 木又は草にて
作り、漆塗にしたる空穗。

ぬりえ 塗柄(名) 物の柄の、漆にて塗り
てあるもの。蜘蛛の糸、寛政の頃までは、
……盆太鼓といふ物、……柄は木にて、墨
にて塗らしたるものなり。……今、淺草寺仲
見世(ち)といふにあるを見れば、形は以
前に變らざれど、……漆の塗柄なり」

ぬりえびら 塗簾(名) 方立(ひ)を木に
て造り、黒く漆塗にしたる、簡略なる簾。
ぬりかくす 塗隠す(動四他) 或文字
畫などの上を塗りて、その文字畫などの
見えぬやうにする。①偽り飾りて、爲した
る事を知られぬやうにする。和合人「自分
が間拔をして貰つた事を塗り隠さんと」

ぬりがさ 塗笠(名) 薄き板に紙を張り
て造り、黒く漆塗にしたる笠。毛吹草、花笠
を塗笠となす(霞かな) 松の蔭、おきた、塗
笠七年早い。菅笠に替へてお召しやれさ」

ぬりかた 塗方(名) 塗る方法。ぬり。
ぬりかたむ 塗固む(動下二他) 繪具(え)を
十分に塗りて彩色す。榮西九十餘の人
の、さばかり塗り固め書きたる繪に」

ぬりかふ 塗替(名) 塗りかふること、又
ぬりかへたる物。ぬりなほし。①「壁」
塗りかへたる物。ぬりなほし。②「壁」
ぬりかへ 塗壁(名) 壁土にて塗りたる
ぬりがまち 塗框(名) 漆塗にしたる床
(の)間の(の)框。

ぬりき 塗木(名) 漆にて塗りたる木。(白
木(しろ)に對して)「塗木の弓」

ぬりきち 塗素地(名) 塗物の素地。ぬ
りしたち。
ぬりぐじ 塗櫓(名) 漆塗にしたる櫓。種

ぬりくす

ぬりくすり 塗薬「名」さつざい(塗擦劑)に同じ。

ぬりくすわ 塗轡「名」漆塗の轡。

ぬりぐら 塗蔵「名」塗籠(の)の類なるべしといふ。「古語」江次第「母屋北二間、爲塗蔵」

ぬりくる 塗りくる「動四他」手に任せて塗る。ことごとく塗る。ぬりこくる。ぬりたくる。ぬりたつ。ぬりちらす。(ぬる(塗る)「三」に同じ。一代女「口紅」を、捨なく塗りくり「一」諸國物語「白粉」を、厚く塗りくり「一」)

ぬりけす 塗消す「動四他」ぬりかす塗ぬりけた塗下駄「名」漆塗の下駄。「一代男」塗下駄を穿(き)きあへずあれば「一」同「塗下駄の音しづかに、……大やうなる道中、何とて、京にては、太夫にはせなんだぞ」(塗りくる)に同じ。

ぬりこくる 塗りこくる「動四他」ぬりくるぬりこひ塗與「名」溜漆(の)に塗りたる與。張與よりは略儀にて、足利時代よりあり。公家用のには、麻あり、武家と僧中とのには無し。ぬりいたし。

ぬりこばや 塗小早「名」彩色してある小船。

ぬりこぼし 柳星「名」二十八宿の「北ぬりこみぬき 塗込貫塗込損「名」小舞(の)を取附くるために設け、塗りこめて隠すやうにしたる貫。

ぬりこむ 塗籠む「動下二他」内に物を籠め、泥土などにて塗り固む。太平記「高山寺の麓、四方二里を、堀に塗り籠めて、食攻(の)にける間」日号又は矢竹又は弦を、全部漆にて塗り隠す。歴代記「二所藤(の)の塗り籠めたる弓」

ぬりこめ 塗籠「名」周囲を厚く壁にて塗籠め、明取(の)を取附け、妻戸によりて出入するやうに造り、衣服調度などを納めおき、又、寝所にも用ひし室、納戸(の)の類。ぬりぐら(塗蔵)参照。竹馬(の)な、塗籠の内に、かぐや姫をいだかへてをり「平治」數多の敵斬り伏せて、塗籠の口まで攻め入りけれども」日号又は矢の

ぬりく

竹を、漆にて全部塗ること、塗方の又その弓矢、平塗塗籠の弓「歴代記」塗籠の矢」

ぬりこめたきやう 塗籠他行「名」他行して不在なりと偽り、塗籠の中に隠れ居ること。留守を使ふこと。狂言「塗籠平太」

「ばけ損はばいかならんと、風呂の小蔭に入りけり。ぬりこめたきやうといふ事も、この時よりぞ初まりける」

ぬりこめどう 塗籠簾「名」簾の巻き方は、重簾(の)と同様に、その簾の上をも、すべて漆にて塗りこめたる弓。ぬりぞう(塗籠)参照。平家「二十四さいたる大中黒の矢真ひ、塗籠簾の弓、脇に挟み」

ぬりこめひみ 塗籠弓「名」塗籠の弓。舞の本「高麗」塗籠弓の四人張」

ぬりさかづき 塗盆「名」漆塗の盆。心中萬年草「黒桶が好からう。塗盆は入らぬ」

ぬりさはす 塗酥す「動四他」さはす酥す(の)に同じ。大藏經「雜物語」鐵地(の)の鐵(の)塗り晒し」

ぬりざや 塗鞘「名」漆塗の鞘。

ぬりざを 塗竿「名」漆塗の竿。集花御簾(の)ども、懸けわたして、塗竿などわたして」

ぬりじ 塗師「名」ぬりものし(塗物師)に同じ。源氏物語「塗師、ヌリシ」

ぬりじた 塗下「名」次條に同じ。

ぬりじたち 塗下地「名」漆又は漆喰(の)などを塗る下地。ぬりきぢ。ぬりした。一代女「鏡臺の塗下地」

ぬりじたつみ 塗下積「名」(建)漆喰(の)塗を施す下地として、煉瓦を積むこと。

ぬりじやくし 塗杓子「名」漆塗の杓子。二代男「塗杓子を取交ぜ」

ぬりだい 塗臺「名」漆塗の臺。御衣「塗臺に小鯛のはねまはりたるは」

ぬりだいく 塗大工「名」かべぬり(壁塗)に同じ。

ぬりたくる 塗りたくる「動四他」ぬりくる(塗りくる)に同じ。

ぬりたけはし 塗竹箸「名」漆塗にしたる塗りくる(塗)に同じ。「る竹箸」

ぬりたつ 塗立つ「動下二他」ぬる(塗る)に同じ。

ぬりつ

ぬりつ ぬりつぬりていふ語。塗りて飾る。ぬりくる。ぬりこくる。

ぬりたて 塗立「名」塗り立つること。ぬりて、未だ時を経ぬこと。俳諧「古遠十太」塗立の畔をゆり出る田螺(の)かな」

ぬりたてうるじ 塗立漆「名」はなうるじ(花漆)に同じ。

ぬりたてもの 塗立物「名」素地(の)に中塗漆を塗り、花漆にて上塗を行ひたるのみにて、特に煩雜なる仕上法を施さざる塗物。普通の漆器は、昔この方法にて製出す。はなぬり(蠟色塗(の)に對して)

ぬりだんす 塗簞笥「名」漆塗の簞笥。江戸の末期に行はれ、多くは割塗(の)なりしかど、黒塗(の)もありたり。

ぬりだる 塗樽「名」やなぎだる(柳樽)に同じ。世間傳「塗樽が斗樽(の)となり」

ぬりたれ 塗垂「名」土藏より庇を作り出して、塗垂(の)にしたるもの。

ぬりちごひ 塗兒衆「名」白粉(の)を塗りたる兒衆。厚化粧の兒衆。狂言「不問座頭」

ぬりちく 塗附く「動下二他」塗りて、附かしむ。なすりつく。日ぬる塗る(の)に強めていふ語。著聞「そらとばけなし」たまひそ。烏帽子はあるは。誰に塗りつけたんとして、かく程に人をだしぬかんとするぞ」

ぬりつくろふ 塗繕ふ「動四他」塗物の損處を、更に漆を塗りて繕ふ。

ぬりつくろ 塗机「名」漆塗の机。柳屋「山の霧に赤夜叉塗机」

ぬりつぶ 塗潰す「動四他」一面に塗り、下地(の)の見えぬやうにす。

ぬりづる 塗弦「名」黒く漆塗にしてあるゆみづる。白弦(の)に對して。今川大覺「白木に、塗弦懸くべからず。子細あることなり」

ぬりて 鐸「名」大なる鈴。ぬて。「古語」

ぬりて

ぬりて 白膠木「名」植ぬるて(白膠木)に同じ。室「白膠木、此云農利堅」

ぬりてのき 白膠木「名」植ぬるて(白膠木)に同じ。字鏡「奴利天木」(う)の轉訛。

ぬりてんばう「名」ぬれてんばう(濡てんば)参照。會書「塗籠の弓の眞中取持ち」

ぬりながもち 塗長持「名」漆塗の長持。一代男「梨子地の塗長持に定紋を附けて、四季の寢道具ととのへて」

ぬりなほす 塗直す「動四他」改めて塗しめりや軒の花」

ぬりの 塗籠「名」漆塗の矢竹。(白籠(の)「焦籠(の)に對して」平家「塗籠に黒保呂(の)はいだる大の矢」歴代記「十五束の塗籠に、鶯の羽、鷹の羽、鶴の本白(の)を、燭(の)ぎ合せたる箭」

ぬりはき 塗掃「名」はく(掃く)を見よ。塗ることと掃くこと。紅(の)を塗り、白粉(の)を掃くこと。

ぬりばし 塗箸「名」漆塗の箸。塗箸で芋を盛(も)る(の)次條に同じ。「謬語」

塗箸で素麵(の)食ふ(の)「つるつる」と滑り落ちて、口に入れ難きよりいふ「物事のなしがたき譬」(謬語)

塗箸で海鼠(の)押へる(の)「前條に同じ」(謬語)

塗箸を食ふ義「前條に同じ」(謬語)

ぬりばし 植「名」植ぬる(の)「植」(の)「くぐりやうさう」孔雀草(の)に同じ。日「はこねさう(箱根草)に同じ。

ぬりひつ 塗櫃「名」漆塗の櫃。

ぬりふさぐ 塗塞ぐ「動四他」塗りてふさぐ。若島「北方の窓塗り塞ぎて」

ぬりふち 塗縁「名」漆塗の縁。一代女「菓子胡桃(の)を、床の塗縁にて刻(の)りくらひ、桐折敷(の)のめけるをも構はず」

अनुसू

ぬる

ぬるむ 微温む【動四自】ぬるくなる。

ぬるむ 微温む【動四自】ぬるくなる。
(古は、冷水のぬるくなるにいひ、今は、熱湯のぬるくなるにいふ)ぬる(微温し)【三】参照。伊勢集、涌くとのみ目には見ゆれどわが宿の石井の水はぬるまきりけり。八笑。その内、少しは、湯もぬるむだらう。【病氣にて、體温加はる。】(古語)【小町集】人知れぬわが思ふ人にあはぬ夜は身さへぬるみて思ほゆるかな。ぬるき湯、温度の低き湯、ぬるまゆ。博多小女歌集、茶碗に湯湯越しに。

ぬるめ 微温湯【名】ぬるき湯、温度の低き湯、ぬるまゆ。博多小女歌集、茶碗に湯湯越しに。

ぬるり【名】ぬるり(滑)に同じ。
ぬる【名】ぬるること。源氏道の露けさも、いと所せし。……女君の、かかるぬれを、怪しと咎めたまひぬべければ。【いづること。ぬれごと。情事。戀。】一代女【この文】は、ぬれの一通て候ふか。五人【人の戀も、濡も、世にある時の物ぞかし。】丹波與作長【の】道中、下下が退屈致すべし。もしぬれなど企つとも。【ぬれに、濡荷の略。】

濡の露【句】前條【】に同じ。重帷子、顔と顔寄せて、しつぽりぬれの露。濡の暮【句】芝居にて、濡事を演ずる幕。

ぬれい 奴隷【名】召使の男。しもべ。下ぬれいろ 濡色【名】水に濡れひたりたる色。聖武ぬれ色の錦を庭にしくものは時雨にきほふ紅葉なりけり。ぬれえん 濡縁【名】雨に濡るに任ずるよりいふ。雨戸の敷居の外に造れる縁がは。嵐雲、濡縁や薔こぼる土ながら。ぬれかかる 濡掛【動四自】次條に同じ。俗語、さんさしぐれか富野の雨か音もせて来て濡れかかる。ぬれかく 濡掛【動下二自】色めきたる行を仕掛く。戀慕の情を、振舞にあらはす。ぬれかかる。生玉心中、少し濡れかけて欺したりや、惚れられ自慢で、もうその事を觸れ歩く。ぬれかけ 濡掛【名】濡れかくること。一

ぬれか

代女【その國里を一人も見遣へることなく、その所言葉を造ひ、嬉しがる濡掛】ぬれかへる 濡返る【動四自】非常に濡る。伊勢集、ぬれ返り玉かつけどもあかなく、頼みし事の絶えてなれば。ぬれかほ 濡顔【名】濡れたるやうす。濡れたるさま。無支、夕立やたらちねならん濡顔もなほつたき女郎花かな。ぬれかみ 濡髪【名】洗ひなどして、水氣の未だ乾かぬ髪。ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれかみ 濡紙【名】水に濡れたる紙。濡紙を剥【かす】やう【句】損はぬやうに、念を入れて取扱ふさま。

ぬれけし

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれけし【色氣】に同じ。

ぬれて

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

ぬれて 濡手【名】水に濡れたる手。

めたる鹽分を洗ひ取るに用ふる濾過器。

和

と發音する類。なほ、

ま居坐(マス)りたくなる。伊賀越道中雙士

子の第五十九章に「有國之母、可_レ以長